

2015年12月11日

演奏会を100倍楽しメール 絶対法則 Vol.5

武満徹の「そよ風の誘惑？」

村中大祐指揮 Orchestra AfiA「自然と音楽」演奏会シリーズ Vol.8

Finding Silk Road ～シルクロードへの旅～

12月11日(金)開演 19時(開場:18時半)

場所:東京四ツ谷 紀尾井ホール

武満徹: ハウ・スロー・ザ・ウィンド

ラヴェル: 組曲「マ・メール・ロワ」、

マーラー:「大地の歌」

(テノール: トーマス・カタヤール、 メゾ・ソプラノ: ラウラ・ニッカネン)

Daisuke Muranaka

ORCHESTRA AFIA (アフィア)

音楽は風

音楽は木々のざわめき

音楽は大地の震動

音楽は水の戯れ

あなたは私たちが描き出す音の風景に、きっと何かエネルギーを感じることでしょ。私たち演奏家が送ったエネルギーを受け取ったら、あなたが感じたエネルギーをこちらに送り返してください。

主役は聴き手の貴方なのです。

会場まで来て、あなたのその手で私たちの音をわし掴みにしてください。

あなたの音がここにあるのです。

村中大祐

村中大祐指揮 Orchestra AfiA（アフィア）の「自然と音楽」演奏会シリーズは今回で第8回目を迎えます。

今回は音を通じて「シルクロード」に思いを馳せて頂ければと思い、プログラムを作ってみました。シルクロードと言えば、その終着点は日本です。正倉院にはシリアなどから当時もたらされた絹が宝物として所蔵されています。

絹の感触は非常に繊細なものですが、それが朽ち果てた時、まるで砂のように崩れ落ちて、風が舞うような気がいたします。武満徹の作品「ハウ・スロー・ザ・ウィンド」には、私がそんな思いを寄せて音を描くつもりです。ただの現代的な音の羅列ではなく、絹の様々な色合いが、音のなかを移り行く姿。それが風の情景と相まって不思議な空間を演出するのです。

自然と音楽。このテーマを本当に理解して表現しようとしたのは、実は我々の国から生まれ、世界で最高度の評価を受けた作曲家、武満徹でした。今回は彼の作品で私が最も好きな曲「ハウ・スロー・ザ・ウィンド」を演奏します。

●武満徹 ハウ・スロー・ザ・ウィンド How slow the wind （1991年の作品）

私がこの作品を最初に選んだのには訳があります。現代作品を毛嫌いする人が多いのはよくわかっているつもりですが、10分ほど我慢してみてください。これからあなたは今まで味わったことのない体験をするのですから。

まず初めに、私からお勧めの聴き方をお教えしましょう。まず目をつぶって。そして10分間だけ音に耳を澄ましてください。目は使わないで。音の醸し出す映像に集中してみてください。映画の一コマのように、風が浮き上がっていくのを体験できるはずです。この曲はエミリー・ディッキンソンが1883年に発表した詩を基に描かれています。詩は以下の通り。

How slow the wind

ゆったりとした風

How slow the sea

静かな海

How late their Feathers be!

なんてゆっくりと舞う羽だろう！



この詩が示しているように、最初はゆったりと、何も無いところから煌めくような音と共に風の背景が生まれ出てきます。場所は海。風が吹くまえの静けさの中で、海鳥の声がこだまするのです。その海の情景から風がゆっくりと吹き始めます。色々な色彩の変化で、風が何かを動かそうとしている様子が聴こえてきませんか？

途中から波の音が聴こえて来ます。気が付きましたか？最初はゆっくりと。そして波と絡み合って、突然狂おしい波へと変化します。鳥の聲がこだました後、また波は落ち着いてゆきます。

このような感じで聴いてみてください。意外に早く音楽は過ぎ去って、そのあまりの早さに、あなたは驚くことでしょう。映像を音に書き換えたような作品に仕上がっているのです。でも音になることで、皮膚感覚で風や波を感じるようになるのではないのでしょうか？

武満徹という人は 1996 年に亡くなったわけですが、鮮明に記憶しているのは、当時私がイタリアのトリエステ・ヴェルディ劇場でグルックの歌劇「オルフェオ」の仕事をしていた時、リハーサルの朝、いつものように La Repubblica (ラ・レプブリカ) という新聞を開けると、作曲家・武満徹の死を悼んで 2 面に亘る記事を掲載していました。日本人の作曲家が亡くなってここまで取り上げられるとは、世界的にも有名だったドイツ人作曲家の H・W・ヘンツェが亡くなった時でさえ、こんな扱いはなかったわけです。それくらい世界中で親しまれた作曲家でしたから、そのスケールは小津安二郎や黒澤明、北野武のレベル、あるいはそれ以上だったのではないのでしょうか。

そんな武満徹が描いた音の心象風景がここに 있습니다。あなたの心に武満の音はどう響くのでしょうか？

●ラヴェル：組曲「マ・メール・ロワ」(マザーグース組曲)

マザーグースと言えば、イギリスやフランスのおとぎ話や民謡をガチョウ婆さんが子供たちに語って聞かせるというのが筋書きなのですが、そこに収蔵されたおとぎ話は、世界中で 1000 を超えると言われていています。ラヴェルにとっては、そう言った「不可思議な」世界は、まさに一風変わった自分の世界と重なったのでしょうか。ラヴェルは、友人であるゴドフスキ家の二人の子供、ミミとジャンにこの組曲を献呈しています。作曲年は 1908 年。ちょうどマーラーの「大地の歌」ができた年です。ピアノ連弾で、2 年後の 1910 年に初演されています。5 曲からなる組曲ですが、どれも一話完結です。なるべく以下の背景を知ってから聴かれることをおすすめします。

ラヴェルが集めた5つの破片は、それぞれにカラフルで、人間くさいドラマがあるのです！

第1曲 眠れる森の美女のパヴァーヌ(*Pavane de la belle au bois dormant*)

Lent(ゆっくりと)

「昔あるところに幸せな王と王妃のカップルがいました。彼らは正直者で、非常に豊かな暮らしぶりでしたが、世継ぎに恵まれず、ただひたすら子ができるよう祈り、ありとあらゆる手をつくします。その甲斐あってか、女の子を身籠ることとなります。その洗礼式として、王と王妃は親族だけでなく、ありとあらゆる友人や貴族、有名人や魔法使いまで呼び寄せて、宴を催したのです。彼らはその日のために宴会場を飾り付け、食卓には金でできた食器を用意させます。そして呼び寄せた7人の魔法使いたちには特別に、それぞれ大きな金のケースを用意して、その中に食器を入れておきました。突如その宴の最中に、年老いた魔女が現れます。彼女はとっくの昔に他界したと思われていて、この宴には招かれていなかったわけですが、彼女が現れると、王は彼女に席を設けて歓待しようとしたのです。ところが運悪く大きな金のケースが足りません。老婆は何かブツブツと言い始めました。それを横で見ているひとりの若い魔法使いは、何か嫌なことが起きると予想して、宴の席から身を隠して、待ちかまえました。誰にも気づかれぬように。

しばらくして宴も佳境に入り、招待客からプレゼントが王と王妃に贈られました。魔女たちはひとりずつ、お世継ぎの姫に《美しさ》、《知性》、《慈悲深さ》、《踊り》、《歌》、《楽器》の才能を与えます。ところが老婆は《姫が腕を針に刺されて息をひきとる》魔法をかけたのです。会場に居たすべてのひとが、悲しみの中で途方に暮れます。そこに身を隠していた若い魔女が現れ、静かにこう語るのです。《姫君は息をひきとることはないでしょう。ご安心ください。老婆の魔術を完全に拭い去ることはできませんが、その魔術に抵抗することはできます。姫様が針に刺された時、甘く深い眠りに落ちるでしょう。その眠りは100年間続きます。そこに王子がやって来ると、彼女を眠りから蘇らせるのです。》」

ラヴェルはこの情景のなかで、多くのひとたちの嘆きと、姫君が深い眠りに落ちている様子を再現しているのかもしれませんが。

第2曲 親指トム(*Petit Poucet*) Tres modere (とてもゆったりとして)

ラヴェルの楽譜の始めに、次のような言葉が置かれています。

「親指トムは暗い夜に自分の足取りがつかめるよう、パンの端をちぎりながら、それを歩く道すがらあちこちにまき散らしておきました。ですがその帰り道、パンの切れ端を頼りにしていたトムは驚くことになるのです。切れ端がたったの一つも見つからないのです！実は

鳥たちがやって来て、トムが道標として撒いておいたパンを、ひとつのこらず食べてしまったという訳です。(シャルル・ペロー)」

第3曲 パゴダの女王レドロネット (*Laideronette, impératrice des pagodes*)

Mouvement de Marche (歩く動きのように)

パゴダとは17世紀の中国の首振り人形のことです。ラヴェルはその自動機械を収集していました。(写真はラヴェル自身が収蔵していたものだそうです。)おそらくスイス人の父親譲りの機械オタクだったのでしょう。彼の父は、あのプッチーニがそうであったように、自動車やバイクの免許を取得しており、ラヴェル自身もこういった機械に幼いころから興味を示したようです。この中国製の首振り機械は、見た目もそれほど美しく華やかなものではなく、奇妙奇天烈な代物ですが、そういった「見たこともないような不思議な世界」を好む嗜好から、この極めてオリエンタル風味の曲を書いたのではないのでしょうか。

「彼女が服を脱いで風呂に入ると、すぐさま機械仕掛けの男と女が歌い出した。そして同時にそこにあった楽器を奏で始めたのだ。何人かはクルミをつぶして作ったギターを手に取り、また何人かはアーモンドの実からできたヴィオラを弾いている。彼らの背格好に合った楽器が必要だったからだ。」



第4曲 美女と野獣の対話 (*Les entretiens de la belle et de la bête*)

Mouvement Valse tres modere (とてもゆったりとしたワルツの動き)

3人娘を持った父が、旅先で悪天候のために近くの館に身を寄せることに。そこには考えもしなかった程の豊かな暮らしぶりがありました。でもそこには誰も居ません。旅の疲れから目の前にあったベッドに横たわり、暖炉の火が眠気を誘うと、瞬く間に眠りに落ちたのです。朝を迎えた父は、豪華な銀食器で食事が用意してあるのをたっぷりと平らげると、庭先に薔薇園を発見します。一番愛する三女が求めたのは、父が摘んだ薔薇の花で

した。父がその薔薇を摘もうとすると、そこに突如野獣が姿を現すのです。「俺が大切に
する薔薇を何故奪うのか？俺はお前に自分のベッドと食事を与えた。その恩に仇で報い
る気か？」と怒り心頭に発しています。「これは娘の為。自分の為ではないのです。」とい
う父親の命乞いに、野獣は条件を出します。「命は助けてやろう。だが、三女を自分の所
に連れて来るのだ。」こうして三女は野獣と暮らし始めますが、その扱いのやさしさに心打
ち解け始めます。さらに三女に対して、野獣が求婚するところから、この曲は始まります。
以下はラヴェルの楽譜に書かれたセリフです。

「あなたの心根のやさしさを思うとき、野獣などとは思えなくなります。」

「ああ、女よ、そうだ。私は優しい心の持ち主だ。でも化け物なのだ。。。」

「あなたよりも、もっと化け物の男たちが、世の人間には沢山いますわ。」

「うまく言えないが、できれば感謝を込めて、そなたの前で素晴らしい言葉を並べ尽くした
いところだ。だが私は獣。。。女よ。そなたは美しい。私の妻になってくれないか？」

「そんな。。。野獣様。」

求婚した野獣は断られますが、彼女に実家が見ることのできる「鏡」をプレゼントします。
ある日彼女は父親が悩みから寝込んでいる様子を見て、野獣に頼むのです。「自分を父
の元に返してほしい。最後に一目逢いたい。」そこで野獣は条件を出します。「7日経つた
ら必ず帰ること」。父親に逢ってみると、父は回復を始めます。その間三女は野獣のこと
ばかり考えるようになります。そして7日目の朝、野獣が夢に出てくるのです。「早く帰っ
てくれ！」その叫びにも似た言葉を胸に、大急ぎで館に戻ると、今度は野獣が死の淵にあっ
て息も絶え絶えとしていました。

「私はそなたにもう一度こうやって
逢えたのだから、これで死んでも
思い残すことはない。」

「いいえ。私の親愛なる野獣様。あ
なたはまだ死なないわ。貴方は生
きて私の旦那様になるのですか
ら。」

野獣は姿を消し、彼女はそこに、
かけられた呪いを解かれた愛す
べき王子の姿をみたのである。



第5曲 妖精の園 (Le jardin féérique) Lent et grave (ゆっくりと、そして重々しく)

眠れる森の美女が王子の口づけで目を覚ます情景でしょうか？それとも野獣が美女の求
婚のお蔭で、その呪いを解かれる場面でしょうか？いずれにせよ、「妖精の園」とは、全て
のおとぎ話の幸福な結末の舞台。そこは妖精によって彩られた極彩色の花園でしょう。自
由に幸せな情景を、音のなかから拾い集めて、お楽しみ頂ければと思います。

●マーラー「大地の歌」

今回の「大地の歌」は、本来の大編成のオーケストラによる公演ではありません。グレン・コルテーゼというアメリカ人が2006年にこの作品を室内オーケストラ用に手を加えて編曲し、それをウィーンにあるユニヴァーサル出版社が認めて「大地の歌」新版として出版した作品の、日本初演となります。

室内オーケストラのために編成をかなり小さくした理由には、大きな編成では歌手の声がオーケストラにかき消される場合も少なくないことが挙げられます。その点で今回お聴き頂くコルテーゼ編曲版は、出来る限りマーラーのオーケストレーションを変えずに編曲されており、歌手に負担をかけることなく、自由な音楽づくりができるはず。紀尾井ホールコンパクトで素晴らしい響きと相俟って、通常得ることのできない細かなニュアンスや、室内樂的な充実感を味わって頂けるとと思います。

グスタフ・マーラーの交響曲は全部で10曲。そしてこの「大地の歌」を交響曲として考えるなら、全11曲が存在することになります。マーラーはミュンヘンで行われた第8交響曲「千人の交響曲」の初演、そしてプラハで行われた第7交響曲「夜の歌」の初演を終えた後、1908年の夏、妻のアルマと共にウィーンから南に下り、南チロル地方のトブラッハから2キロほど離れたアルトシュルーダーバッハにやってきました。ここで「大地の歌」と交響曲第9番のスケッチを書き上げるのです。マーラーは作曲のために、山の景観が見事で、幾部屋もあるような大きな農家を借りたのですが、そこから数百メートルしか離れていない森の中に新しい小屋を建て、中には縦型ピアノを設置して、従来からの習慣となったひと夏の作曲にいそしんだのです。

マーラーはこの作曲当初の様子を、初演指揮者のブルーノ・ワルターに次のように語っています。「今回は作曲する場所を変えなければならないだけでなく、生き方そのものを変える必要があった。これまでは早いペースで山登りをしながら頂上まで辿り着く間曲の構想を練っていたが、そうやって苦しい思いをする見返りとして、ひとつの曲が出来上がっていた。悩みを抱えて山登りをすれば、下り坂に差し掛かる頃にはそうした悩みはすっかり消え去っていたのだ。それに比べて、今は孤独の中に置き去りにされて、じっと自分の声を聞きながら、体調が思わしくないことを実感する日々を送っている。自分がこうして田舎に居る時、街中で暮らす時とは違って、全く気が紛れることはなく、ただひたすら自分自身を見つめ、その内なる声を聞くしかない。

もし自分の歩むべき道を再発見する必要があるなら、やはりこうやって自分を孤独の淵に叩き込むしかないようだ。(中略) たった一つの衝撃は私の光と安らぎを、同時に奪い去った。そして何ひとつそこには残らなかった。もぬけの殻になったというわけだ。つまり私は自分の人生を新たに始めなければならず、まさに若人なのだ。若人なのだから、つまり自分自身や人生と向き合う喜びに満ち溢れているということなのだ。(中略) 今私は相当な情熱を持って作曲している。そのことから考えても分かる通り、今の私は大変気持ちが晴れ晴れとして調子が良いのだ。」

妻のアルマによれば、娘を失った悲しみから逃れるため、マーラーはまるで「罪人のように」この夏作曲に没頭したといます。丁度その頃彼らを訪れた友人からプレゼントされたのが、ハンス・ベトゲ(1876~1946)の編纂した「中国の笛」という詩集だったのです。アルマによると、マーラーは「その詩集を自分なりにまとめ上げ、間奏曲を挿入し、素材を強調しながら独自の様式に統合して行った結果、交響曲のような形が浮かび上がってきた」ということです。この年1908年、マーラーは47歳になったばかり。彼は当時3つの打撃に苦しんでいました。一つは既に言及した最愛の娘の死。そして自分の心臓に障害がある疑い。そして10年以上の歳月を過ごしたウィーン国立歌劇場音楽監督業務との決別でした。でも彼を苦しめるには、「たった一つの衝撃」である娘の死の知らせだけで十分だったといます。その苦しみから逃れるために作曲を始め、そしてひと夏で出来上がったのが、偶然にも友人からもらった中国の詩をモチーフとした「大地の歌」だったのです。

私が最初にマーラー作品として興味を持ったのは、この年に同時に作曲された第9番でした。私が大学生時代のことです。当時は、多くの学者が「死を意識した」曲として、今日お贈りする「大地の歌」と共に第9を評していたのです。でもマーラー自身が初演指揮者のフルターに語った上記の内容は、どちらかと言えば「苦しみや悲しみを克服し、生を渴望する芸術家のエネルギー」に満ちたものだったような気がするのです。

昨年他界した指揮者のクラウディオ・アッバードは、ベルリンで交響曲第6番「悲劇的」を指揮した当時、たしか2005年でしたが、自分が大腸がんに侵されて殆ど食べられずやせ細っていました。でもマーラーの交響曲を演奏する度に「生への渴望を経験した」と語っていたのを、今でも鮮明に覚えています。果たしてこの曲が表現するものは「生」でしょうか？それとも「死」でしょうか？相反するものではあって

も、表裏一体ともとれるこの両者。私は「生」を司る神に懸けてみたいと思うので
す。皆さんはどうお感じになられるでしょうか？

「大地の歌」は以下 6 曲から構成されています。

「大地の歌」対訳

1. Das Trinklied vom Jammer der Erde 大地の嘆きを歌う酒歌（李白の詩
による）

Schon winkt der Wein im gold'nen Pokale,
この黄金の杯を酒で満たすのはいいが
Doch trinkt noch nicht, erst sing' ich euch ein Lied!
まだ飲んでではならんぞ。酒は私がお前たちに歌ってからにしろ。
Das Lied vom Kummer
苦しみの歌は
Soll auflachend in die Seele euch klingen.
けたたましく笑いながらお前たちの魂に響きわたることだろう。
Wenn der Kummer naht,
苦しみが近づいて来たら
Liegen wüst die Gärten der Seele,
その魂の庭は殺伐として
Welkt hin und stirbt die Freude, der Gesang.
しおれ果ててしまおうだろう。そして喜びは潰え、歌う声も枯れ果てるのだ。
Dunkel ist das Leben, ist der Tod.
暗闇は人生、そして死を意味する。
Herr dieses Hauses!
この王国の所有者よ！
Dein Keller birgt die Fülle des goldenen Weins!
君の酒蔵は黄金の酒に満たされているではないか！

Hier, diese Laute nenn' ich mein!
それでは、ここにあるリュートを我が物としよう！
Die Laute schlagen und die Gläser leeren,
このリュートを弾いて杯を飲み干せば
Das sind die Dinge, die zusammen passen.
音楽と酒の相性は抜群に良い。

Ein voller Becher Weins zur rechten Zeit
然るべき時に酒を杯になみなみ注ぐことは
Ist mehr wert, als alle Reiche dieser Erde!
地球上のどんな王国より価値があるのだ。
Dunkel ist das Leben, ist der Tod.
暗闇とは人生、そして死を意味する。

Das Firmament blaut ewig und die Erde
天空は青々として果てしなく、大地は
Wird lange fest steh'n und aufblüh'n im Lenz.
どこまでもしっかりと根を張って、春になると花が咲き乱れる。
Du aber, Mensch, wie lang lebst denn du?
人間よ、お前はどれだけ生を享受できるというのか？
Nicht hundert Jahre darfst du dich ergötzen
神のように振る舞えるのも、僅か 100 年足らずだ。
An all dem morschen Tande dieser Erde!
この世の腐り切った虫けらどもにそんなことをしてどうしようと言うのか。
Seht dort hinab!
あそこを見下ろしてみるがいい。
Im Mondschein auf den Gräbern
月の光が墓地を照らし出しているだろう。
Hockt eine wildgespenstische Gestalt!
そこにうずくまっている妖怪の存在にお前は気が付いたか？
Ein Aff' ist's! Hört ihr, wie sein Heulen
そいつは猿なのだ。聴け！お前たちよ。猿の叫びを！
Hinausgell't in den süßen Duft des Lebens!
その雄叫びは人生の甘い香りを粉々に打ち砕くのだ！
Jetzt nehmt den Wein!
さあ、今こそ杯を取るがよい！
Jetzt ist es Zeit, Genossen!
時は満ちた。楽しむがよかろう！

Leert eure goldnen Becher zu Grund!
黄金の杯を底まで飲み干すがいい！

Dunkel ist das Leben, ist der Tod!
暗闇は人生を、そして死を意味するのだ！

2. Der Einsame im Herbst 秋の寂しさを纏う男（錢起の詩から）

Herbstnebel wallen bläulich überm See;
秋の霧が湖の青々と覆っている
Vom Reif bezogen stehen alle Gräser;
霜が降りたことで草がピンと立ち上がったかのようだ
Man meint, ein Künstler habe Staub vom Jade
芸術的な匠の技で翡翠石からできた粉を
Über die feinen Blüten ausgestreut.
素敵花々の上にまき散らしたのではないかと人は思うだろう。
Der süße Duft der Blumen ist verflogen;
花々の甘い香りは流れ去って
Ein kalter Wind beugt ihre Stengel nieder.
冷たい風が吹くと花の茎はお辞儀を始める
Bald werden die verwelkten,
やがてしおれて
gold'nen Blätter Der Lotosblüten
金色になり果てた蓮の花の哀れな姿が
auf dem Wasser zieh'n.
湖面に浮かび上がることだろう。
Mein Herz ist müde.
わたしの心は疲れ果て
Meine kleine Lampe Erlosch mit Knistern,
わたしの小さな灯りもパチパチと音を立てて消え失せ
es gemahnt mich an den Schlaf.
深い眠りへといざなわれる
Ich komm zu dir, traute Ruhestätte!
夢の中で私はお前の元を訪れよう、我が愛しの心安らぐ街よ！
Ja, gib mir Ruh,
そうだ、私に安らぎをおくれ。
ich hab Erquickung not!
私にはエネルギーの補給が必要なのだ。

Ich weine viel in meinen Einsamkeiten.
私はたった一人、孤独のなかで泣いている
Der Herbst in meinem Herzen währt zu lange.
秋という季節が私の心のなかに長く居座り過ぎたようだ
Sonne der Liebe,
愛を語る太陽よ
willst du nie mehr scheinen,
お前は私を二度と照らすことはないのか？
Um meine bittern Tränen mild aufzutrocknen?
私のこの苦しみの涙を優しく癒してくれないのか？

3. Vn der Jugend 若さについて(李白の詩をモチーフに)

Mitten in dem kleinen Teiche Steht
小さな池の真ん中に立っているのは
ein Pavillon aus grünem
一棟の東屋で、緑色と
Und aus weißem Porzellan.
白い磁器で彩られている。
Wie der Rücken eines Tigers Wölbt
それはまるでトラの背骨のような具合に
die Brücke sich aus Jade
翡翠石で出来上がった橋が、弧を描いて
Zu dem Pavillon hinüber.
展示室の方にまでまたがっている
In dem Häuschen sitzen Freunde,
その小さな家屋には友人たちが集い
Schön gekleidet, trinken, plaudern,
美しく着飾って、飲んだりお喋りをして
Manche schreiben Verse nieder.
多くは詩吟を書き綴っているようだ
Ihre seidnen Ärmel gleiten Rückwärts,
絹地の袖は後ろに着崩されて
ihre seidnen Mützen Hocken lustig tief
絹の帽子は楽し気に深々とぶら下げられて

im Nacken.

襟元にまで及んでいた

Auf des kleinen Teiches stiller Wasserfläche

小さな池の静かな水面には

zeigt sich alles Wunderlich im Spiegelbilde.

その様子が鏡にでも映したかのように見事に浮かび上がるのだった

Alles auf dem Kopfe stehend

そこに映ったものは全てが頭を下にして立っている。

In dem Pavillon aus grünem

緑色と白の磁器でできた

Und aus weißem Porzellan;

この東屋では

Wie ein Halbmond steht die Brücke,

太鼓橋が半月のようにかかって

Umgekehrt der Bogen. Freunde,

しかも描かれた弧(こ)は逆さまで

Schön gekleidet, trinken, plaudern.

着飾った友人が飲み、語る姿もまた逆さまなのは一興である。

4. Von der Schönheit 美しくさとは？（李白の詩をモチーフに）

Junge Mädchen pflücken Blumen,

うら若き娘たちが花摘みをして

Pflücken Lotosblumen an dem Uferrande.

楽しんでるのは水辺の蓮の花

Zwischen Büschen und Blättern sitzen sie,

娘たちは茂みと葉っぱの間に腰を下ろし

Sammeln Blüten in den Schoß

膝上に花びらを集めながら

und rufen Sich einander Neckereien zu.

きまぐれに互いを呼び合っている

Goldne Sonne webt um die Gestalten,

黄金色に輝く太陽は形を変えながら

Spiegelt sie im blanken Wasser wider.

水面にキラキラと鏡のごとくに輝いている

Sonne spiegelt ihre schlanken Glieder,
日の光は華奢な娘たちの身体を水面に映し出し
Ihre süßen Augen wider,
彼女らの可愛らしい瞳もそこに映っている
Und der Zephyr hebt mit Schmeichelkosen
そしてそよ風は柔らかに吹きながら
das Gewebe Ihrer Ärmel auf,
娘たちの着物の袂を揺らしながら魔法をかけて
führt den Zauber Ihrer Wohlgerüche durch die Luft.
彼女たちのかぐわしい香りを空気中にまき散らすのだ
O sieh, 見よ
was tummeln sich für schöne Knaben Dort
あそこにいる美しい男の子たちは何を騒ぎ立てているのか？
an dem Uferrand auf mut'gen Rossen?
水辺で勇ましい馬にまたがって。
Weithin glänzend wie die Sonnenstrahlen,
どこまでも輝きを放つ太陽の光のようだ
Schon zwischen dem Geäst
野原の枝と枝の隙間を
der grünen Weiden trabt
駆け抜けていくのは
das jungfrische Volk einher!
若く生き生きとした男の子たちだ！
Das Roß des einen wiehert fröhlich auf
一人の跨る馬が喜び勇んで嘶くと
Und scheut und saust dahin,
怖気づきながら走り去って
Über Blumen, Gräser, wanken hin die Hufe,
その蹄が花や雑草を蹴散らしてゆく
Sie zerstampfen jäh im Sturm
蹄はにわかにな、まるで嵐のように
die hingesunknen Blüten.
落ちた花々を踏みつけにしてゆく

Hei! Wie flattern im Taumel seine Mähnen,
何と！その鬣(たてがみ)は熱に浮かれたように揺れながら

Dampfen heiß die Nüstern!
熱い熱気が鼻の孔から噴き出している
Gold'ne Sonne webt um die Gestalten,
黄金色の太陽はその形を変えながら
Spiegelt sie im blanken Wasser wider.
水面にキラキラと鏡のごとくに輝いている
Und die schönste von den Jungfrau'n
若い娘のなかでも一番の美女が
sendet Lange Blicke ihm der Sehnsucht nach.
彼に憧れの想いととも長い眼差しを送っている
Ihre stolze Haltung ist nur Verstellung.
彼女の毅然とした物腰は見せかけに過ぎない
In dem Funkeln ihrer großen Augen,
彼女のその大きな瞳の奥に潜む輝きや
In dem Dunkel ihres heißen Blicks Schwingt
その熱い眼差しが翳りのなかにも
klagend noch die Erregung ihres Herzens nach.
悩ましいまでの彼女の心の奥底に潜む情熱が見え隠れしているのだ。

5. Der Trunkene im Frühling 春に酔いし者（李白の詩をモチーフ）

Wenn nur ein Traum das Leben ist,
この人生がただの夢だったなら
Warum denn Müh und Plag'?
何故にこの労苦と嘆きがあるのだろうか？
Ich trinke, bis ich nicht mehr kann,
俺はもうこれ以上無理なほど酒を飲む
Den ganzen, lieben Tag!
この素晴らしいまる一日を飲み明かすのだ
Und wenn ich nicht mehr trinken kann,
そしてもうこれ以上飲めなくなったなら
Weil Kehl und Seele voll,
喉と魂が満たされたのだから
So tauml' ich bis zu meiner Tür
家の扉まで行って倒れ込み

Und schlafe wundervoll!
そして不思議なほど気持ちよく眠るというわけだ
Was hör ich beim Erwachen? Horch!
目が覚めたら何が聴こえるかって？はっはー！
Ein Vogel singt im Baum.
鳥の奴が梢で口ずさむのさ
Ich frag ihn, ob schon Frühling sei,
俺はそいつにこう尋ねるんだ。おい、もう春は来たのか？ってな
Mir ist als wie im Traum.
俺にとってはまるで夢の中みたいな話さ
Der Vogel zwitschert: Ja!
その鳥はさえずってこう言うのさ。もちろん！ってな
Der Lenz ist da, sei kommen über Nacht!
春はそこまで来ている。もう一晩で春が来るってな
Aus tiefstem Schauen lauscht' ich auf,
そして俺は深い眼差しを向けながら耳を澄ます
Der Vogel singt und lacht!
すると鳥の奴が歌いながら笑ってる
Ich fülle mir den Becher neu
そこで俺は新たに杯に酒をなみなみと注ぐのさ
Und leer' ihn bis zum Grund und singe,
そして杯を最後の一滴まで飲み干して歌うんだ
bis der Mond erglänzt am schwarzen Firmament!
黒い天空にお月さまがキラリと光るのが見えるまで
Und wenn ich nicht mehr singen kann,
そして俺がもうこれ以上歌えなくなったなら
So schlaf' ich wieder ein,
再び眠りに落ちるのさ
Was geht mich denn der Frühling an!?
春が一体全体どうしたって言うんだ？
Laßt mich betrunken sein!
酒に酔っぱらえりゃ、それでいいじゃねえか！

6. Der Abschied 別れ（孟浩然と王維から）

Die Sonne scheidet hinter dem Gebirge.
山の彼方を日が落ちてゆく
In alle Täler steigt der Abend nieder
夕闇が谷全体を覆い隠すと
Mit seinen Schatten, die voll Kühlung sind.
その暗い影があたり一帯を冷え冷えとさせてゆく
O sieh! Wie eine Silberbarke schwebt
見るがいい！銀の小舟がゆらゆらと揺れて
Der Mond am blauen Himmelssee herauf.
月は青い天空の海にぽっかりと浮かび上がる
Ich spüre eines feinen Windes Weh'n
私は微風がそよぐのを頬に感じる
Hinter den dunklen Fichten!
その暗がりに聳え立つ松の木陰で
Der Bach singt voller Wohllaut
小川は大声で喜びを謳いあげている
durch das Dunkel. Die Blumen blassen
暗がりをつたって。花々は咲き乱れている
im Dämmerchein.
この夕闇に紛れて。
Die Erde atmet voll von Ruh' und Schlaf,
この大地は安らぎ眠りながら息をしている
Alle Sehnsucht will nun träumen.
すべての憧れは今ここで夢に誘われようとしているのだ
Die müden Menschen geh'n heimwärts,
疲れ切った人々は足早に家路を辿り
Um im Schlaf vergess'nes Glück
忘却の彼方へと忘れ去った幸せを深い眠りのなかに見出しながら
Und Jugend neu zu lernen!
若かりし頃を新たに蘇らせるのだ！
Die Vögel hocken still in ihren Zweigen.
小枝に鳥たちが静かにうづくまると
Die Welt schläft ein!
この世は眠りに落ちたと言えよう

Es wehet kühl im Schatten meiner Fichten.
私が居る松の木陰は冷え冷えとしている
Ich stehe hier und harre meines Freundes;
私はここに立ちつくし、友の来訪を待ちわびている
Ich harre sein zum letzten Lebewohl.
彼に最後の別れを告げるのを待っているのだ
Ich sehne mich, o Freund, an deiner Seite
友よ、私はお前の傍らで
Die Schönheit dieses Abends zu genießen.
この美しい夕べの時を共に愉しむことを切望しているのだ
Wo bleibst du? Du läßt mich lang allein!
一体どこにいるのだ？私をこんなに長く一人にしておくとは！
Ich wandle auf und nieder
私は行きつ戻りつしながら
mit meiner Laute auf Wegen,
お前の来る道に立ってリュートを抱えてお前の来訪を待ちわびているのだ
die vom weichen Grase schwellen.
この柔らかい草で盛り上がった道の上で。
O Schönheit! O ewigen Liebens
ああ、何と美しいことだ！ああ、永久に続く愛と
- Lebens - trunk'ne welt!
人生に酔いしれし世界よ！

Er stieg vom Pferd und reichte
その男は馬から降りると、手を伸ばし
ihm den Trunk des Abschieds dar.
待っていた男に別れの杯を手渡した。
Er fragte ihn, wohin er führe
待っていた男は彼に尋ねた。お前はどこへ向かうのか？と。
und auch warum es müßte sein.
そして何故行かねばならないのか？と。
Er sprach, seine Stimme war umflort:
その男はこう答えて言った。その声は憂いに満ちていた
Du, mein Freund, Mir war auf dieser Welt
友よ、私にとってこの世界では

das Glück nicht hold! Wohin ich geh'?

幸せに縁がなかったのだよ！私がこれからどこへ行くかって？

Ich geh', ich wand're in die Berge.

私は歩き彷徨って山を越え

Ich suche Ruhe für mein einsam Herz.

この孤独な心を癒してくれる場所を探すのだ

Ich wandle nach der Heimat, meiner Stätte.

故郷を、我が街を求めて彷徨うのだ。

Ich werde niemals in die Ferne schweifen.

だが決して遠方を彷徨いはしない。

Still ist mein Herz und harret seiner Stunde!

私のこころは静けさに満ち足りて、安らぎの時を待ちわびている。

Die liebe Erde allüberall Blüht auf im Lenz

愛する大地は春爛漫にここかしこと咲きわたっている。

und grünt aufs neu!

木々は青々と新緑に満ち溢れているではないか！

Allüberall und ewig Blauen licht die Fernen!

隅々まで永久に遥か彼方まで青い光が輝きわたっている

Ewig... ewig...

永遠に...永遠に...